



經  
 典  
 餘  
 師  
 小學之部  
 五

口 11  
 2047  
 42



門口 二 二  
番 卷  
2.067  
42

讀法

小學卷之九

漢の陳孝婦

年十六

而嫁

未

有子

其夫

行

當

且

行

時

屬

孝婦

曰

我

生

死

未

知

幸

可

漢陳孝婦年十六而嫁未  
 有子其夫  
 當行戍漢の代の時陳の國に、姑母に孝行  
 且行時屬孝婦曰我生死未可知幸  
 有老母無他兄弟備養吾不還汝肯  
 養吾母乎婦應曰諾夫の孝婦に附屬  
 死不還婦養姑不衰慈愛愈固紡績  
 夫果死

經典餘帛

小學卷之九

一

不婦姑と養て  
衰へ不慈愛愈  
固紡績織紵  
以家業と為終  
嫁意無喪に居  
と三年

其父母其少  
子無而之  
夫去時屬  
婦曰夫去時  
養之  
人之老母と養て  
卒不能人に  
許す能く將に  
信を能く將に

何と以て世に立  
將自殺を欲其  
父母懼て敢嫁  
也遂に其姑と養  
二十八八年姑八十  
餘夫年と以終盡  
其田宅財物と  
賣以之と葬終  
に祭祀に奉

淮陽の太守以  
聞使者と使  
黄金四十斤と  
賜之と復して  
終身與所無  
ひ號て孝婦と  
曰

織紵以為家業終無嫁意居喪三年

其父死に其の孝婦姑母と慈愛やま  
いへ衰へざりたり紡績織紵とて業し喪  
中とほめてす其父母哀其少無子而  
嫁心まにたり

蚕寡也將取嫁之孝婦曰夫去時屬

妾以供養老母妾既許諾之夫養人

老母而不能卒許人以諾不能信將

何以立於世欲自殺其父母懼而不

敢嫁也遂使養其姑

衰へ取戻て他へ嫁せんとす孝婦ハ  
人や夫出去とて其に屬とて余許容

親を懼て遂に止む  
二十八八年姑八十餘以

天年終盡賣其田宅財物以葬之終

奉祭祀

死にたればかの孝婦も田地居宅財物と  
りりけり奉祀祭祀等とせり

淮陽太守以聞使者賜黄金四十

斤復之終身無所與號曰孝婦

守をれ天子へ奏聞り天子の  
感やうりや依て黄金四十斤を賜て田地

居宅とより復し且課役もかり與と  
りり依て孝婦と名づけり

漢の鮑宣妻桓氏。字少君。宣嘗就少君學。父其清苦。奇之。故以女妻之。送資賄甚盛。

宣悅不。妻に謂て曰。少君富驕に生て美飾に習り。而て吾に貧賤なり。敢禮に當不。妻曰。大人先生徳と修約と守と。故に賤妾とて

漢鮑宣妻桓氏。字少君。宣嘗就少君學。父其清苦。故以女妻之。送資賄甚盛。

宣不悅。謂妻曰。少君生富驕。習美飾。而吾實貧賤。不敢當禮。妻曰。大人以先生修徳守約。故使賤妾侍執巾櫛。既奉承君子。惟命是從。

巾櫛と執に侍せ使。既に君子に奉承す。惟命のすに是從と

宣笑て曰。能是の如んが是吾志也。妻乃悉心く侍御服飾と歸更めて短布裳と著。宣與共に鹿車と挽。郷里に歸。姑と拜して禮と畢。遂に道に出。婦道を修行。郷邦之と稱に

敢當といふれば、妻の少君あましく、曰、は大人賤妾と以、君が左右のりつらつらといふん、本朝が徳高身と修徳約と守、うへかゆふなり、跪に君に奉承、身がわが、いさやうあり、君が命に從、んもの、さうり、左のり、用事、巾櫛と、宣笑曰、能、如是、是、吾志也、妻乃悉、歸侍御服飾、更著短布裳、與宣共挽鹿車、歸郷里、拜姑禮畢、提甕出汲、修行婦道、郷邦稱之、

と禮拜し、常に麴と提水と及て婦の道と修  
行すれば、郷邦の人々、いづれも稱美いづるあり

曹爽從弟文叔妻譙郡夏侯文寧

之女名令女文叔蚤死服闋自以年

少無子恐家必嫁已乃斷髮為信其

後家果欲嫁之令女聞即復以刀截

兩耳居止常依爽及爽被誅曹氏盡

死令女叔父上書與曹氏絕昏彊迎

令女歸時文寧為梁相憐其少執義

又曹氏無遺類冀其意阻乃微使人

風之令女嘆且泣曰吾亦惟之許之

是也曹爽が從弟に文叔といふものあり、其妻  
は名を令女といひて、譙郡の夏侯文寧の

女なり、人志るるに夫の文叔も死し、服闋後  
きららにあり、やう、我も少子なり、がら、さうい

嫁の事と評議せしむ、恐て髮を断て信を  
らり、さう果しと他家へ嫁せんとし、とせしむ

て令女は、兩方の耳を截り、常に曹爽  
の家に住止るるふ、うけと司馬氏に天下の權

威をうたはれ、けらふ曹氏は死せしむ、令女  
叔父願書と上て曹氏と縁を絶て令女を産

迎へ、父の文寧、梁の國の宰相とせしむ、令  
女が貞女の義を守とあり、又曹氏の遺を

諫にいせせらふ、令女嘆泣し、我も余は、風  
と以て何とぞ、とせしむ、の意の阻、さうい

人々氣を許し、さういけらる、家以為信防之

家以為信と為之、  
と防し、少く解ら  
令女是に於竊

曹爽從弟文叔妻譙郡夏侯文寧之女名令女文叔蚤死服闋自以年少無子恐家必嫁已乃斷髮為信其後家果欲嫁之令女聞即復以刀截兩耳居止常依爽及爽被誅曹氏盡死令女叔父上書與曹氏絕昏彊迎令女歸時文寧為梁相憐其少執義又曹氏無遺類冀其意阻乃微使人風之令女嘆且泣曰吾亦惟之許之是也

曹爽從弟文叔妻譙郡夏侯文寧之女名令女文叔蚤死服闋自以年少無子恐家必嫁已乃斷髮為信其後家果欲嫁之令女聞即復以刀截兩耳居止常依爽及爽被誅曹氏盡死令女叔父上書與曹氏絕昏彊迎令女歸時文寧為梁相憐其少執義又曹氏無遺類冀其意阻乃微使人風之令女嘆且泣曰吾亦惟之許之是也

に寢室に入刀を以鼻と劔被と蒙りて臥。其母呼で與に語も應不

或を之に謂て曰。人の世間に生に。輕塵の弱草に棲る如耳。何ぞ辛苦を

盡ぬ此と守誰為にせん欲哉令女曰聞仁者改り不義者存亡と以心と易不曹氏前に盛たる之時尚終と保ん

唐の鄭義宗が妻盧氏。畧書史に甚婦道と得嘗夜強盜數十

少懈。令女於是竊入寢室。以刀斲鼻

蒙被而卧。其母呼與語。不應。發被視之。其

之血流滿床。席舉家驚惶。往視之。其

不酸鼻。家内信之。令女防之。其

或謂之曰。人生世間。如輕塵棲弱草耳。何辛

苦乃爾。且夫家夷滅已盡。守此欲誰為哉。

令女曰。聞仁者不以盛衰改節。義者

不以存亡易心。曹氏前盛之時尚欲

保終。况今衰亡。何忍棄之。禽獸之行

吾豈為乎。人の世間に人の一生を

守るの心は。今日仁義と重んずる

人の存亡盛衰の爲に。易んずる曹

氏の全盛時に及んで。心と變るべし

禽獸の行は。吾

唐鄭義宗妻盧氏。畧書史に甚婦道と得

嘗夜強盜數十持杖

姑甚得婦道。嘗夜有強盜數十持杖

持杖

有叔と持て鼓譟  
垣と踰て而して  
人家人悉奔  
竄唯唯姑の  
自在室に在る  
白刃と冒て往  
姑の側に至る  
の爲に推撃せ  
れ幾死と

賊去て後家人  
問何獨懼不  
盧氏曰人の禽  
獸に異る所以  
の者其仁義有  
と以也鄰里急  
有尚相起

救況や姑に在  
而して委棄可  
萬一危禍ある  
若んば豈宜く獨  
生宜や宜(渡)於

唐の奉天の竇  
氏の二女草野  
に生長す如う  
志操有永  
泰中羣盜數  
千人其村落  
剽掠一女子皆  
容色有長者  
者年十九幼者  
者年十六巖穴  
に匿之曳出驅

鼓譟踰垣而入家人悉奔竄唯唯姑  
自在室盧肩白刃往至姑側爲賊挫  
擊幾死唐の鄭義宗と云ふもの、妻の盧氏の  
大畧書史に目と涙を流して

人問何獨不懼盧氏曰人所以異於  
禽獸者以其有仁義也鄰里有急尚  
相起救況在於姑而可委棄乎若萬

一危禍豈宜獨生盜賊に異る所以  
の者其仁義有と以也

唐奉天竇氏二女生長草野幼有  
志操永泰中羣盜數千人剽掠其村落

二女皆有容色長者年十九幼者年  
十六匿巖穴間曳出之驅迫以前臨  
經谷深數百尺其姊先曰吾寧就死

追て以分崩。谷の深く數百尺に墮り、其姉先日五箇壺死に就き、義等一と受不即ち崖下に投て而て死。盜方に驚駭す、其妹之に繼自投せ足、破面流血、草野中を流、盜乃之と捨て、京兆の尹第五琦其貞死を嘉して之を奏と詔り、其門閭に旌表し、永其家の丁徭と綱。

義不受辱即投崖下而死。盜方驚駭其妹繼之自投折足破面流血草盜乃捨之而去。京兆尹第五琦嘉其貞烈奏之詔旌表其門閭永綱其家丁徭。  
唐の世の時奉天といふ縣に竇氏の女二人あり、草野中に生長といふも幼うといふも志操あり、京兆の尹第五琦其貞死を嘉して之を奏と詔り、其門閭に旌表し、永其家の丁徭と綱。

事に達し、天子へ奏し、其徳とその閭の門に旌表し、永其家の丁徭と綱。

繆彤少孤、兄弟四人皆同財業。及諸婦遂求分異。又數有鬪爭之言。彤深懷忿嘆、乃掩戶自擗、曰：繆彤修身、謹行、學聖人之法、將以齊風俗、齊整之。

○繆彤少孤、兄弟四人皆同財業、及諸婦遂求分異、又數有鬪爭之言。彤深懷忿嘆、乃掩戶自擗、曰：繆彤修身、謹行、學聖人之法、將以齊風俗、奈何不能正其家乎。弟及諸婦聞之、悉叩頭謝罪、遂更為敦睦之行。



と將。奈何其家  
 と正うす。と能  
 不平。弟と及諸  
 婦之と聞て。悉  
 く叩頭て罪と  
 謝す。遂に更めて  
 敦睦之行と為  
 り。將二渡

蘇瓊。南清河の  
 太守。有百姓  
 百。皆て昔明と  
 田と爭。年と  
 積て斷せ不各  
 相援。據て乃ち  
 百人に。至瓊。昔  
 明兄弟と。乃ち  
 之と諭て。曰く。

天下得難者ハ  
 兄弟求易者ハ  
 田地得。假令  
 兄弟と失。心  
 如何。因て涙と  
 下。諸證人。泣  
 と灑。不。莫。普  
 明兄弟叩頭て  
 外に更。心。を  
 分。異。す。十年  
 遂に還て同居す

王祥が弟覽が  
 母の朱氏祥に  
 遇。無道

妻とむ。取に申。諸の婦相争。て家財  
 と分て家と異にせん。繆彤。深忿。莫  
 戸と掩て。身と擡。莫。時  
 繆彤。聖人の法と守。行。時  
 の。風俗。齊。正。の。婦。と。聞。は。悉。く。頭。と。叩。て。謝。罪。す。
 と。や。り。遂。に。敦。睦。と。風。儀。と。人。に。サ。ガ。バ。リ。ア。リ。

○蘇瓊除南清河太守有百姓百  
 明兄弟爭田積年不斷各相援據乃  
 至百人瓊召昔明兄弟諭之曰天下  
 難得者兄弟易求者田地假令得田  
 地失兄弟心如何因而下淚諸證人

莫不灑泣昔明兄弟叩頭乞外更思  
 分異十年遂還同住  
 地の太守。サ。ガ。リ。て。中。々。も。の。地。に。ハ。昔。明。と。
 い。つ。も。の。兄。弟。い。さ。や。り。田。地。と。争。ふ。て。各。相。に  
 理。窟。と。援。據。て。積。年。不。斷。す。
 証。人。に。泣。き。下。り。
 蘇。瓊。の。兄。弟。と。論。て  
 之。を。聞。て。人。の。道。と。以。て。た。と。叩。頭。て。
 乞。ふ。外。に。更。に。心。を。
 分。異。す。十年。
 遂。に。還。て。同。居。す。

○王祥弟覽母朱氏遇祥無道覽年  
 王祥が弟覽が  
 母の朱氏祥に  
 遇。無道

かり覽年數歲。祥楚捷被夜と見れる輒涕泣抱持至。成童に至り毎に其母と諫其母少く凶虐と止朱屨非理と以祥と使覽祥與俱に又祥妻と虐使す覽が妻も亦趨て之と共み朱之と患て張ら止。⊕

數歲見祥被楚捷輒涕泣抱持至于成童每諫其母其母少止凶虐六數以非理使祥覽與祥俱又虐使祥妻覽妻亦趨而共之朱患之乃止。王祥母無道。其母の實子なく數歲みしやうの母いりて兄と楚捷をくく泣泣て抱持そのみち成童の歳みたり常に母と諫して少く母も凶虐と止けたり。母常に非理をくくくく王祥と使くく王覽も俱にそのくくくく王祥妻と虐使す。朱氏との繼母の氏やう。

患にもくく相止けるぞ、朱氏との繼母の氏やう

晋の右僕射鄧攸永嘉の末石勒に没られ泗水と過攸牛馬と以妻子と負て而して逃人賊に其牛馬と擄遇て歩走して其兒及其弟の子を擔兩まらふと能せ不しと度て乃ち

○晋右僕射鄧攸永嘉末没于石勒過泗水攸以牛馬負妻子而逃又遇賊掠其牛馬歩走擔其兒及其弟子綏度不能兩全乃謂其妻曰吾弟蚤亡唯有一息理不可絶止應自棄我兒耳幸而得存我後當有子妻泣而從之乃棄其子而去之卒以無嗣。晋僕射に鄧攸といふ人あり永嘉年中の末に石勒といふものに都を攻没され泗水に

我兒と棄應耳  
 幸めて而して  
 存して得い我  
 後に當に子有  
 當妻泣て而し  
 之に従ふ乃ち其  
 子と棄而して之  
 と去卒に以て  
 嗣無應二度子  
 時の人義  
 而して之と哀  
 之が為に語りて  
 曰天道知  
 無鄧伯道とて  
 兒無使弟の子  
 綏彼が喪に服  
 三年

筋と適行し、が妻子と負し牛馬とも賊徒に  
 掠らて、歩走みく吾幼兒と弟子の綏とと擔  
 てかげやとく、心におもひやうとて山間やが  
 と度て妻にうりうり、そが弟登たうせし  
 人の子息のふれり、道理に於てまてがう、みれ弟  
 息の絶がう、吾兒と棄べさやう、存生の幸  
 福といふもれあう、後に子あるべしとつひされ、妻も  
 泣くもとがうり、依て一生嗣子のあざりしとやうに  
 時人義而哀之。爲之語曰。天道無知  
 使鄧伯道無兒。弟子綏服。彼喪三年  
 きの時人くその義理にうんと哀しく語らる  
 天道の明白やうといかひいしが、かやうのこれそのやう  
 ふうりて、天道もこれ知らざらむらうと○又  
 説しんさやうとく、うつち棄らる子もその身畜  
 責にうりてけうず親子對面をうりて、いくがうらむら  
 ちかうきとやう、尤もいあるとさやかり、まてすに従子  
 の綏れくもよびて、あとのあくととあひ、三  
 年のもに服てつとめしとかなり

亂の威寧年中  
 に疫す庾袞の  
 二兄俱亡な次  
 の兄毗復危殆  
 なり、膺氣方に  
 藏なり、父母兄  
 弟皆出外に去  
 袞獨留りて去  
 不詣父兄之と  
 強及ち日、袞が  
 性病を畏不遂  
 に親自扶持し  
 て晝夜眠不  
 其間復振と  
 無哀臨するも  
 較不此如する

○晉咸寧年中疫庾袞二兄俱亡次  
 兄毗復危殆膺氣方熾父母諸父兄  
 弟出于外袞獨留不去諸父兄強之  
 乃曰袞性不畏病遂親自扶持晝夜  
 不眠其間復撫柩哀臨不較如此十  
 有餘旬疫勢既歇家人乃次毗病得  
 差袞亦無恙  
 晉の咸寧年中疫病ありて二兄に  
 二人かうべくせり、次の兄に名と庾毗といふ  
 ぬまて病ぬく危殆なり、これと世間さまり



廳堂の間往往  
憚慢と隔障  
て寢息之所  
為時就て休  
還て共に談  
笑す椿年老  
曾て他處に  
歸津扶持  
前に假寝  
安否と承候す

椿津年六十に  
過て並に合鼎  
に登而津常  
に且莫叅問  
子姪階下に羅  
列す椿坐と命

セ不ハ津敢て坐  
セ不椿毎に近  
出或ハ日斜ま  
に至不ハ津親  
飲セ不椿還て  
然して後に共に  
食す食するも  
ハ則津親匙  
箸と授味いと  
に皆先嘗椿  
食と命して然  
後に入食す

津津州と為  
椿京宅に在四  
時の嘉味有毎  
に輒使の次因  
て之と附若或

廳堂間往往憚慢隔障為寢息之

所時就休偃還共談笑椿年老曾他

處醉歸津扶持還室假寢閣前承候

安否廳堂の間往往憚慢と以て隔障

たぐいに談笑たのこもたりとふるみ揚椿も老年に

揚津わんごらに扶持して室にうつり閣の前假

椿津年過六十並登台鼎而津常且

莫叅問子姪羅列階下椿不命坐津

不敢坐椿毎近出或日斜不至津不

先飯椿還然後共食食則津親授匙

箸味皆先嘗椿命食然後食津六十

にやりのるるる合鼎の位にのるる鼎の星の若

かづもより、それふうとて司徒司馬司徒の三の

職とり揚津ハ司空といなり、忠の揚椿ハ司徒

ハ坐席と命命ごての坐せりたり又揚椿ハ近

所へ出て日斜まふかりてハ弟揚津ハ飲笑

椿在京宅每有四時嘉味輒因使次

附之若或未寄不先入口一家之内

ハ未寄未ハ先  
吟に入不。一家  
之内男女百口  
總服饗と同一  
庭に間言無

男女百口。總服同饗庭無間言。

揚津

肆州の受領職となり、京都にあり、  
の食物に嘉味やうりめ、使の次に贈附に  
せり、いさぎ寄さる先へ、吟ほもごころ、家内百人  
けり四代をり一所にきいたるに、間言無  
かろりたり、誠に人々もつらう、かろり、  
饗とい一所に朝夕の食事、いさぎ、  
衣服の四代をりにかり肉縁の爲に著す、  
衣服たり、火にたくふり

隋の吏部尚書  
牛弘弟弼酒と  
好で而して酔す。  
嘗て酔て弘を駕  
車牛と射殺。弘  
宅に還。其妻迎  
て弘に語て曰く  
叔牛と射殺す。

○隋吏部尚書牛弘弟弼好酒而酔  
嘗酔射殺弘駕車牛。弘還宅其妻迎  
謂弘曰。叔射殺牛。弘聞無所恠問直  
答曰。作脯坐定其妻又曰。叔射殺牛。

弘聞て恠問所  
無。直答て曰。脯  
に作。坐定て其  
妻又曰。叔牛と  
射殺。大に是異  
事なり。弘曰。已  
に知る顔色自  
若し。て書と讀  
輟不

大是異事。弘曰。已知顔色自若讀書

不輟。隋の吏部尚書の職に牛弘といへる人あり

弟の駕車牛と射殺す。牛弘の妻その夫の  
く、とす。してかくとつけたり。牛弘の  
聞て、少しも恠む。故に問て、その  
牛も脯にして、おんともさへし、  
就て復す。告まん、是のふるまひ、異事なり。  
弘ふ牛弘とて、それともさへし、  
く、とす。してかくとつけたり。牛弘の  
聞て、少しも恠む。故に問て、その  
牛も脯にして、おんともさへし、  
就て復す。告まん、是のふるまひ、異事なり。  
弘ふ牛弘とて、それともさへし、

唐の英公李勣  
勣貴て、僕射  
爲、其姉病、必  
必ず親爲に火

○唐英公李勣貴爲僕射其姉病必  
親爲燧火煮粥火焚其鬚姉曰僕妾

必す親爲に火

親爲燧火煮粥火焚其鬚姉曰僕妾







て曰。世人喜て  
好人無の三字  
と言者、謂可  
能賊之都と。古  
人言人皆以て  
堯舜為可と。  
蓋此と觀而て  
之と知なるん矣。於

萬石君石奮  
家に歸老す宮  
の門闕と過  
必下車趨見  
路馬と見  
趨路馬と見  
必す軼す子孫  
小吏為もの來  
歸て謁すれ萬  
石君必す朝服  
して之に見て名  
と不す馬

子孫過失有  
誦讓せ不。為に  
便坐して案に  
對して食せ不。  
然して後諸子  
相責長老に因  
肉袒して固罪と  
謝し之と改之  
乃許

之曰。世人喜言無好人三字者可謂  
自賊者矣。古人言人皆可以為堯舜  
蓋觀於此而知之。  
謂、善なり、好人無との三字、呂榮公の言くこと  
ゆへ、とより、我自、己が徳と賊害と、りふものなり  
び、や、かやうに、廉直の、もれとあれ、は、  
の場所、と、と、學で、つゝ、るべし、との事、も、無理、ふ、  
あ、げ、う、此、等、あ、く、  
觀、ハ、と、サ、リ、

○萬石君石奮歸老于家過宮門闕  
必下車趨見路馬必軼馬子孫為小

吏來歸謁萬石君必朝服見之不名  
西漢の、名、高、人、に、萬、石、君、石、奮、と、い、つ、る、は、年、老、  
と、が、家、に、を、り、て、老、を、ヤ、ら、ふ、の、官、官、と、さ、ら、け、る、君  
の、宮、殿、の、門、と、過、つ、た、い、つ、の、車、より、下、り、趨、て  
と、ち、り、と、な、り、路、馬、と、く、君、の、車、と、ひ、く、馬、の、ち、る  
所、と、す、れ、ば、軼、禮、し、て、と、ら、ふ、又、子、孫、の、中、に、  
小、吏、と、な、り、來、て、謁、す、る、も、此、あ、れ、ば、萬、石、君、は、  
朝、の、衣、服、ふ、く、思、ひ、つ、て、子、孫、有、過、失、不  
そ、れ、名、と、ふ、さ、り、と、さ、り、 子孫有過失不  
誦讓為便坐對案不食然後諸子相  
責因長老肉袒固謝罪改之乃許  
の、中、に、過、失、あ、れ、ば、誦、讓、し、と、ら、ふ、  
一、く、食、事、と、し、せ、ん、案、に、對、し、や、が、  
共、に、責、あ、ら、せ、ら、れ、り、一、族、の、長、老、の、人、へ、  
謝、し、之、と、改、之、乃、許、

子孫勝冠者勝たる者側ふ在側燕必冠申申如也僮僕訥訥如也唯謹

上時賜食於家必稽首俯伏而食如在上前其執喪哀戚甚子孫遵教亦如之

之の如す。

萬石君家孝謹以郡國聞齊魯の諸儒皆自以為不及也

長子建郎中令為少子慶為內史建老白首萬石君尚無五日洗沐歸謁親入子舍親問侍者取中翊廁

ひ、固と謝罪々々肉祖といひまうとの 杖と云はんとの 為かり、さて今日より改更しとのてのら許容あり

子孫勝冠者勝たる者側ふ在側燕必冠申申如也僮僕訥訥如也唯謹

也僮僕訥訥如也唯謹子孫の中冠冠也

著に勝たる、年々のやうに、側座にあれば、燕居のやうに、あつた時といふも、必ず冠とたぐ

してあつたやうに、そのかゝら申す、ふと、又僮僕もの對して、訥訥如げふと、

上時賜食於家必稽首俯伏而食如在上前其執喪哀戚甚子孫遵教亦如之

上と天子や、時、食物と下

賜り、その首を替て俯伏して、食す

上、前の前に在る、禮法の、

萬石君家以孝謹聞乎郡國雖齊魯諸儒皆自以為不及也

萬石君の、家風、

諸儒皆自以為不及也

て、孝行の謹、郡國、

魯の二國、聖人以後、儒者、

長子建為郎中令

少子慶為內史建老白首萬石君尚無

無恙每五日洗沐歸謁親入子舍

問侍者取親中翊廁身自浣滌復與侍者不敢令萬石君知之以為常

て身自滌滌して復て侍者に與ふ  
取て萬石君と  
て之と知令不  
以て常と為

内史慶醉て歸  
外門に入て車  
下萬石君

慶恐て肉祖  
罪と謝す許不  
舉宗及兄の建

肉祖萬石君  
讓て日内史ハ  
貴人ハ。閭里に  
人々ハ里中の

長老ハ皆走匿  
而内史車中  
に坐して自如  
一固に當れり

乃ら謝して慶  
罷慶及諸子  
里門に入ると  
ハ趨て家に至

疏廣太子太傅  
為一疏  
散骨と云黄  
金二十斤と加  
賜す太子五十  
斤を贈郷里に

長子の建ハ即中令とヤリ、少子の慶ハ内史  
とヤリ、まれば長子建ハ老て白首とヤリ、少子

父萬石君ハ勤と引て五日に親に謝す、子舎に入

浴と云、家に入れば親に謝す、子舎に入

廁論と云、侍者に問て、親尊の中帯と洗滌

醉歸入外門不下車萬石君聞之不

食慶恐肉祖謝罪不許舉宗及兄建

肉祖萬石君讓曰内史貴人入閭里

里中長老皆走匿而内史坐車中自

如固當乃謝罷慶慶及諸子入里門

趨至家あつとま里の外門と車より下りて下り

とつれ、萬石君きて自身の食事ともせざり、  
バ慶恐とて、肉祖とて謝罪とのと、  
別に云ふも、許す、  
建にいさるも、肉祖とて、  
里に云ふも、内史の職ヤレ、  
閭里に入バ長老知兒、  
固當とて、  
の昔、  
づれ、  
より下て家に趨り

○疏廣為太子太傅上疏乞散骨加  
賜黃金二十斤太子贈五十斤歸郷  
里日令家供具設酒食請族人故舊

歸て日に家と  
具と供て酒  
食と談族一人  
故舊賓客と請  
て相與に娛樂  
す數其家に金  
の餘尚幾介有  
や問趣一賣し  
以具と共

居て歲餘りて  
廣子孫竊に  
其昆弟老人の  
廣を信愛する所  
の者に謂て曰く  
子孫莫くハ君  
が時に及頗る

産業の基址と  
並ん人日の飲  
食に費て且に盡  
と且宜く夫人の  
所に從て君に  
田宅と置と  
勸説宜く老人即  
ち暇暇の時と  
以て廣が為に  
此計と云

廣曰吾豈老悖  
不念子孫哉顧  
自右舊田廬有  
子孫勤令之衣  
食た共るに足  
以凡人

賓客相與娛樂數問其家金餘尚有

幾斤趣賣以共具西漢の代に皇太子の

人年老れればむむ故里に去退

ひて老と養保とを言上りて上

二十斤又太子より五十斤と賜

郷里に去りて毎時酒食の家具と設け

さて故人故舊の人々と賓客とに娛樂

尚幾介ありとつとて酒食の家具珍物と趣

賣て共具居歲餘廣子孫竊謂其昆弟

老人廣所信愛者曰子孫莫及君時

頗立産業基址今日飲食費且盡

從丈人所勸説君置田宅老人即以

間暇時爲廣言此計一年餘りて

一行して人々吾輩つゝに心に冀ひかやうに君

の富貴かり時難と云うるに産業の基

址と置置んと云ふに置いとに勸説

費等に君に田宅居宅と置いとに勸説

廣曰吾豈老悖不念子孫哉顧自有

舊田廬令子孫勤力其中足以共衣

食與凡人齊今復增益之以爲贏餘

勤令之衣食た共るに足以凡人



妻子前に耘ぎ耨こ未二度一

表指さぎて而し問とて曰い先生せんせい苦く居ぐ畝あ而し不肯くわん官くわん祿りやく後ご世せい

以もつて子こ孫そんに遺い之を以もつて安やす雖すなは未ま遺い所ところ無なく為なる未ま也なり表ひょう

獨ひとり之の遺いに安やす以もつて遺い所ところ同おなく不ふと雖すなは未ま遺い所ところ無なく為なる未ま也なり表ひょう

嘆なげ息いきして而し去さ未ま二に度一

陶淵明たうえんめい彭澤へうたく令しん不ふ以もつて家累からい自みづか隨ま

給たまふ難がた今いま遣つか此こ力りき助たす汝なん薪しん水すい之の勞らう此こ

亦また人ひと子こ也なり可べ善ぜん遇ぐ之を令しん不ふ以もつて家累からい自みづか隨ま

送おく一いつ力りき給たまふ其その子こ書か曰い汝なん且かつ夕ゆふ之の費ひ自みづか

給たまふ難がた今いま遣つか此こ力りき助たす汝なん薪しん水すい之の勞らう此こ

亦また人ひと子こ也なり可べ善ぜん遇ぐ之を令しん不ふ以もつて家累からい自みづか隨ま

つうふ城府じやうふ市中しちゆうにびざりらるる輩たぐひに夫妻ふうさいの禮れいと敬けいむく賓客ひんかくのびざりし諸侯しよほたゞくといふも

家かと出でずし太守たうしゆう劉表りうひょう少せうく候こうたるがらうし麗れい公こう先生せんせい耕かうと釋しやくて壟りゆうの上のうへに休息きゅうしやくとつらうる

表ひょう指さぎて而し問とて曰い先生せんせい苦く居ぐ畝あ而し不肯くわん官くわん祿りやく後ご世せい以もつて子こ孫そんに遺い之を以もつて安やす雖すなは未ま遺い所ところ無なく為なる未ま也なり表ひょう

獨ひとり之の遺いに安やす以もつて遺い所ところ同おなく不ふと雖すなは未ま遺い所ところ無なく為なる未ま也なり表ひょう

嘆なげ息いきして而し去さ未ま二に度一

陶淵明たうえんめい彭澤へうたく令しん不ふ以もつて家累からい自みづか隨ま

給たまふ難がた今いま遣つか此こ力りき助たす汝なん薪しん水すい之の勞らう此こ

亦また人ひと子こ也なり可べ善ぜん遇ぐ之を令しん不ふ以もつて家累からい自みづか隨ま

送おく一いつ力りき給たまふ其その子こ書か曰い汝なん且かつ夕ゆふ之の費ひ自みづか

給たまふ難がた今いま遣つか此こ力りき助たす汝なん薪しん水すい之の勞らう此こ

經典餘師

小學卷之九

二十一

也。善之に遇す可

且書狀とてさうへやまその文に曰、汝のこゝろ且、  
家、勤に於、勤べし、今、僕とせり、家内、  
の給事とて、薪水の苦勞を、  
まう、僕が、此、亦、人の子、  
の、人、や、不、堪、の、善、く、遇、使、べし、

崔孝芬、兄弟、孝義、慈厚、弟、孝曄、等、  
弟、孝、  
順之禮と盡す、  
坐食進退、  
其、  
敢て不也、  
鳴て而して起、  
顔色と温、  
錢尺帛、  
房に入不、

○崔孝芬兄弟、孝義慈厚、弟孝曄等、  
奉孝芬、盡恭順之禮、坐食進退、孝芬、  
不命則不敢也、鷄鳴而起、且温顔色、  
一錢尺帛不入私房、吉凶有須、聚對、  
分給諸婦、亦相親愛、有無共之、  
と、孝、  
の、  
禮、  
の、  
錢、  
語、  
聚、  
有、  
孝、  
夕、  
決、  
入、  
此、

須、  
對、  
婦、  
有、  
共、

禮、  
の、  
錢、  
語、  
聚、  
有、  
孝、  
夕、  
決、  
入、  
此、

孝、  
既、  
孝、  
李、  
事、  
温、  
啓、  
巨、  
決、  
出、

孝芬等、承奉叔母李氏、若事所生、且、  
夕温清、出入啓覲、家事巨細、一以咨、  
決、每兄弟出行、有獲、則尺寸以上、皆、  
入李之庫、四時分賚、李氏自裁之、如、  
此、二十餘歲、  
時、  
親、  
親、

有<sup>う</sup>と<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>。則<sup>すなは</sup>尺<sup>ば</sup>寸<sup>ば</sup>以上<sup>に</sup>。此<sup>の</sup>白<sup>き</sup>李<sup>し</sup>之<sup>の</sup>庫<sup>ぐら</sup>に入<sup>り</sup>て。四<sup>つ</sup>時<sup>の</sup>分<sup>り</sup>賚<sup>ら</sup>。李<sup>し</sup>氏<sup>の</sup>自<sup>ら</sup>之<sup>の</sup>裁<sup>さ</sup>す。此<sup>の</sup>如<sup>く</sup>と<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>。二十<sup>に</sup>餘<sup>り</sup>歲<sup>せ</sup>

叔母<sup>ぢうぼ</sup>りり<sup>り</sup>に<sup>に</sup>未<sup>ま</sup>承<sup>じやう</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup>所<sup>しよ</sup>生<sup>じやう</sup>に<sup>に</sup>事<sup>じ</sup>ふ<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>。且<sup>かつ</sup>夕<sup>た</sup>に<sup>に</sup>温<sup>おん</sup>清<sup>じやう</sup>と<sup>と</sup>た<sup>た</sup>へ<sup>へ</sup>他<sup>た</sup>出<sup>し</sup>に<sup>に</sup>い<sup>い</sup>づ<sup>づ</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>。啓<sup>けい</sup>ら<sup>ら</sup>げ<sup>げ</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>。叔<sup>ぢう</sup>母<sup>ぼ</sup>に<sup>に</sup>答<sup>こた</sup>へ<sup>へ</sup>る<sup>る</sup>。叔<sup>ぢう</sup>母<sup>ぼ</sup>の<sup>の</sup>尺<sup>しゃく</sup>寸<sup>すん</sup>け<sup>け</sup>の<sup>の</sup>物<sup>もの</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>得<sup>え</sup>て<sup>て</sup>これ<sup>を</sup>が<sup>が</sup>叔<sup>ぢう</sup>母<sup>ぼ</sup>の<sup>の</sup>庫<sup>ぐら</sup>に<sup>に</sup>納<sup>な</sup>入<sup>り</sup>て<sup>て</sup>家<sup>け</sup>内<sup>ない</sup>へ<sup>へ</sup>四<sup>し</sup>時<sup>の</sup>の<sup>の</sup>分<sup>り</sup>賚<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>。叔<sup>ぢう</sup>母<sup>ぼ</sup>の<sup>の</sup>裁<sup>さ</sup>す<sup>す</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>。二十<sup>に</sup>餘<sup>り</sup>年<sup>ねん</sup>と<sup>と</sup>過<sup>と</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>。

王<sup>わう</sup>凝<sup>ぎやう</sup>常<sup>じやう</sup>に<sup>に</sup>居<sup>ゐ</sup>る<sup>る</sup>。子<sup>し</sup>孫<sup>そん</sup>非<sup>ひ</sup>公<sup>こう</sup>服<sup>ふく</sup>不<sup>ふ</sup>

○王凝常居慄如也。子孫非公服不

見<sup>み</sup>闔<sup>かん</sup>門<sup>もん</sup>之<sup>の</sup>内<sup>ない</sup>若<sup>し</sup>朝<sup>てう</sup>廷<sup>てい</sup>焉<sup>やん</sup>。御<sup>ご</sup>家<sup>け</sup>以<sup>もつ</sup>四<sup>し</sup>教<sup>きやう</sup>

見闔門之内若朝廷焉。御家以四教

勤<sup>きん</sup>儉<sup>けん</sup>恭<sup>きん</sup>恕<sup>じよ</sup>。正<sup>せい</sup>家<sup>け</sup>以<sup>もつ</sup>四<sup>し</sup>禮<sup>らい</sup>。冠<sup>くわん</sup>婚<sup>こん</sup>喪<sup>さう</sup>祭<sup>さい</sup>聖<sup>せい</sup>

勤儉恭恕。正家以四禮。冠婚喪祭聖

人<sup>にん</sup>之<sup>の</sup>書<sup>しよ</sup>及<sup>及び</sup>公<sup>こう</sup>服<sup>ふく</sup>禮<sup>らい</sup>器<sup>き</sup>不<sup>ふ</sup>假<sup>か</sup>垣<sup>げん</sup>屋<sup>え</sup>什<sup>じつ</sup>物<sup>ぶつ</sup>

人之書及公服禮器不假垣屋什物

必<sup>かならず</sup>堅<sup>けん</sup>朴<sup>ぱく</sup>。曰<sup>いは</sup>無<sup>な</sup>苟<sup>く</sup>費<sup>ひ</sup>也<sup>や</sup>。門<sup>もん</sup>巷<sup>かう</sup>果<sup>くわ</sup>木<sup>ぼく</sup>必<sup>かならず</sup>方<sup>は</sup>

必堅朴曰無苟費也。門巷果木必方

列<sup>れつ</sup>曰<sup>いは</sup>無<sup>な</sup>苟<sup>く</sup>亂<sup>らん</sup>也<sup>や</sup>。

列曰無苟亂也。

祭<sup>さい</sup>。聖<sup>せい</sup>人<sup>にん</sup>之<sup>の</sup>書<sup>しよ</sup>及<sup>及び</sup>公<sup>こう</sup>服<sup>ふく</sup>禮<sup>らい</sup>器<sup>き</sup>不<sup>ふ</sup>假<sup>か</sup>垣<sup>げん</sup>屋<sup>え</sup>什<sup>じつ</sup>物<sup>ぶつ</sup>

と祭一とやせり。且ガ子孫に朝廷の公服やぐみしやり。闔門夫婦の附合やくも礼儀ふれおとやせり。常に家と神の法に四の教あり。づやは事と勤て怠惰夫一やは儉約と兼つと。三やは心に恭敬とす。又四は心に人の憂無情と忠恕と。の類や。又家法と正規やは。四の禮と。委曲に志し。大いに一は冠禮。二は昏禮。三は喪禮。四は祭禮。聖人の經書や。公の禮服祭事。對の表に用る器の。内に備て人。堅介に。屋宅垣屏家の什物。門外巷の果木。並木。苟且の費や。門外巷の果木。並木。方正列置。何事や。亂し。と。

曰<sup>いは</sup>苟<sup>く</sup>も<sup>も</sup>費<sup>ひ</sup>す<sup>す</sup>と<sup>と</sup>無<sup>な</sup>也<sup>や</sup>。門<sup>もん</sup>巷<sup>かう</sup>果<sup>くわ</sup>木<sup>ぼく</sup>

曰苟も費すと無也。門巷果木

必<sup>かならず</sup>方<sup>は</sup>堅<sup>けん</sup>朴<sup>ぱく</sup>也<sup>や</sup>。曰<sup>いは</sup>無<sup>な</sup>苟<sup>く</sup>亂<sup>らん</sup>也<sup>や</sup>。

必方堅朴也。曰無苟亂也。

無<sup>な</sup>也<sup>や</sup>。門<sup>もん</sup>巷<sup>かう</sup>果<sup>くわ</sup>木<sup>ぼく</sup>必<sup>かならず</sup>方<sup>は</sup>

無也。門巷果木必方

張<sup>ちやう</sup>公<sup>こう</sup>藝<sup>ぎ</sup>九<sup>く</sup>世<sup>せ</sup>同<sup>どう</sup>居<sup>き</sup>。北<sup>きた</sup>齊<sup>せい</sup>隋<sup>ずい</sup>唐<sup>たう</sup>皆<sup>け</sup>旌<sup>せい</sup>

張公藝九世同居。北齊隋唐皆旌

居<sup>き</sup>。北<sup>きた</sup>齊<sup>せい</sup>隋<sup>ずい</sup>唐<sup>たう</sup>皆<sup>け</sup>旌<sup>せい</sup>

居。北齊隋唐皆旌

張<sup>ちやう</sup>公<sup>こう</sup>藝<sup>ぎ</sup>九<sup>く</sup>世<sup>せ</sup>同<sup>どう</sup>居<sup>き</sup>。北<sup>きた</sup>齊<sup>せい</sup>隋<sup>ずい</sup>唐<sup>たう</sup>皆<sup>け</sup>旌<sup>せい</sup>

張公藝九世同居。北齊隋唐皆旌

經<sup>きやう</sup>典<sup>てん</sup>餘<sup>じよ</sup>師<sup>し</sup>

張公藝九世同居。北齊隋唐皆旌

小學<sup>しよがく</sup>卷<sup>まき</sup>之<sup>の</sup>九<sup>く</sup>

張公藝九世同居。北齊隋唐皆旌



皆其門に旌表す。麟德中。高宗泰山と封じて其宅に幸し。公藝に見て其能族と睦く

其意に以為。宗族の協不所以。尊長衣食或ハ幼禮節或ハ備不

望で遂に争奪と為。苟能相與に之と忍。則ち家道雍睦を矣

韓文公董生行と作て曰。淮水桐栢の山より出。東に馳こ

表其門。麟德中。高宗封泰山。幸其宅。召見公藝。問其所以能睦族之道。公藝請紙筆以對。乃書忍字百餘。以進

其意以為。宗族の協不所以。尊長衣食或ハ幼禮節或ハ備不。更相責望。遂為争奪。苟能相

與忍之。則家道雍睦矣。其意以為。宗族の協不所以。尊長衣食或ハ幼禮節或ハ備不。更相責望。遂為争奪。苟能相

○韓文公作董生行曰。淮水出桐栢。山東馳遙遙千里。不能休。泚水出其側。不能千里。百里入淮流。壽州屬縣

有安豐。韓文公の唐の大儒なり、同時に董生とて、人のありけり。徳をうけんとし、時にあらず。世にまじりて、公の友なり、その事と唱惜しむ。公の友なり、

流壽州之屬縣に安豊有。

唐の貞元年時縣人董生召南

隱居して義と其中に行。刺史も薦し能不天子名聲と聞不。爵祿門に及不。門外に惟吏有。日に來て租と徵。更に錢と索。於

嗟哉董生朝に出耕。夜に歸て古人の書と讀。盡日自息と不得。或山に而して推。或水に而して漁。厨に入て其旨と具堂に上て起居と問。父母し感感妻不。妻亦も容容

嗟哉董生孝のて且慈心あり人

行とい歌の一體なり、魁地名とさし出す。出の一體なり、濞水とく名高大河あり、相柏の山より出て東へ過るかにたれ馳て千里のゆるり、休とさとしひのゆるり、その側邊に濞水といつる河あり、魁の百里なり、その淮といつるにたれ、まれらるる同川あり、そのとまけぬとあり、董生にたつるれあく、土地の風景らり、そのふり、かり、その邊と壽州といへる國の縣あり、安豊といつる。

唐貞元年時縣人董生召南  
隱居行義於其中刺史不能薦天子  
不聞名聲爵祿不及門門外惟有吏  
日來徵租更索錢  
召南といつるのそのれ中に隱居して身行義と

嗟哉董生朝出耕夜歸讀古人書盡  
日不得息或山而推或水而漁入厨  
具井旨上堂問起居父母不感感妻  
子不容容  
嗟哉董生朝出耕夜歸讀古人書盡日不得息或山而推或水而漁入厨具井旨上堂問起居父母不感感妻子不容容

嗟哉董生孝のて且慈心あり人

嗟哉董生孝且

識不。惟天翁の  
知く有。祥と生  
瑞と下して休期  
無。家に狗有乳  
一。出。食。未。雞  
り。來。て。其。兒。に。哺  
す。庭。中。に。啄。啄  
して。蟲。蟻。と。拾  
之。に。哺。て。も。食。不  
鳴。聲。悲。心。の。狗  
復。躑。躑。久。不。去  
去。不。翼。と。以  
來。覆。て。狗。の。歸  
と。待

慈人不識。惟有天翁。知生祥。下瑞無  
休期。家有狗乳。出求食。雞來哺其兒  
啄啄庭中。拾蟲蟻。哺之不食。鳴聲悲  
彷徨躑躑。久不去。以翼來覆。待狗歸  
嗟哉董生。誰將與儔。時之人。夫妻相虐。兄弟  
為儻。食君之祿。而令父母愁。亦獨何  
心。嗟哉董生。無與儔。  
嗟哉董生。誰將與儔。時之人。夫妻相虐。兄弟  
為儻。食君之祿。而令父母愁。亦獨何  
心。嗟哉董生。無與儔。

唐の心第儻と  
為君之祿と食  
て而も父母と  
て愁令。村獨  
に何の心ぞ。嗟  
哉董生與に儔  
きく無。

唐の河東の節  
度使柳公綽。公  
郷の間に在り  
最。家。法。有。に。名  
中。門。の。東。に  
小。齋。有。朝。謁。之

○唐河東節度使柳公綽。在公郷間  
最。名。有。家。法。中。門。東。有。小。齋。自。非。朝  
謁。之。日。每。平。旦。輒。出。至。小。齋。諸。子。仲

日に非ざる自平  
且毎に輒ら出  
小齋に至諸子  
仲郵比自束帶  
して中門之北に  
晨省す。於

公緯私事と  
決て賓客に接  
て弟公權及  
羣從弟與。再  
會て食す。

且自莫に至す  
小齋と離不。燭  
至。ハ則一人の  
子弟に命て經  
史と執し躬讀

郢皆束帶晨省於中門之北。唐の河

節度使に柳公緯といつるは、その位三公家、公

郷の間なり。家法たゞして人々給とたふさ

たり。中門に小齋とて、諸子朝延、朝

の外と平且よりその所におり、諸子朝延、朝

子息仲郵とて、束帶威儀とて、公緯決て

中門の北に晨省ふにほむとたり。公緯決て

私事。接賓客與弟公權及羣從弟再

會食。公緯私家事とて、決て賓客あれ

離小齋燭至則命一人子弟執經史

躬讀一過訖乃講議居官治家之法

或論文或聽琴至人定鐘然後歸寢

諸子復昏定於中門之北凡二十餘

年未嘗一日變易目より莫とていつく小

其遇饑歲則諸子皆

蔬食曰昔吾兄弟侍先君爲丹州刺

史以學業未成不聽食肉吾不敢忘

州の刺史爲に

一過一訖乃  
及ら官に府家

と治すの法と講  
議す或ハ文と論

ト。或ハ琴と聽人  
定鐘に至て然

後に寢に歸諸  
子復中門之北

に昏定す。凡て  
二十餘年未嘗

一日も變易セ未  
未二讀於

其饑歲に遇ハ  
則諸子皆蔬

食す。日昔に吾  
兄弟先君丹

州の刺史爲に

一過一訖乃  
及ら官に府家

と治すの法と講  
議す或ハ文と論

ト。或ハ琴と聽人  
定鐘に至て然

後に寢に歸諸  
子復中門之北

に昏定す。凡て  
二十餘年未嘗

一日も變易セ未  
未二讀於

其饑歲に遇ハ  
則諸子皆蔬

食す。日昔に吾  
兄弟先君丹

州の刺史爲に

侍學業未成

未と以て肉と

食するを聽不

五口敢て亡心不

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也 饑饉の歳ふ諸の子弟は蔬食とて

吾の兄弟のり先君が刺史となりて丹州

成荒かりて肉食飲酒とゆるさず酒

精進しつれがり姑姊妹姪有執廢者

雖疎遠必爲擇婿嫁之皆用刻木

奩纈文絹爲資裝常言必待資裝豐

備何如嫁不失時

の中あぐも替とるぐく嫁せしむ推奩と刻木と

のうみ衣服ハ纈文絹と以て資装とす

とらふが常たつそ資装の豊備と

待らるに嫁聚の時節とらふ不考なり

及公綽

卒仲郢一遵其法事公權如事公綽

非甚病見公權未嘗不束帶爲京兆

尹鹽鐵使出遇公權於通衢必下馬

端笏立候公權過乃上馬公權莫歸

必束帶迎候馬首公權屢以爲言仲

郢終不以官達有小改

法に遵守尙父の公權にほつるく父の

公權に見ゆふ病甚重うぬらういつろく

束帶とけけ後京都の兆尹とて

鐵ののけけ後京都の兆尹とて

通衢にくらけは馬と下りて笏と端して立公權

の過るの後に馬たのり公權莫あんに歸れ

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

小く改むと有未  
未度發

公綽妻韓氏

相國休之曾孫

約めて播紳家の

楷範為柳氏に

歸して三年少長

齒と放と見未

常に絹素と衣て

綾羅錦繡と用

不未二度

歸觀する毎に金

碧の輿に乗不風

竹兜子に乗一の

青衣步履して

以隨ふ常に命

トて苦參黃連

熊膽と粉や

和で丸と為諸

子に賜永夜習

學する毎に之と

會以勤苦と資

東帶一馬の首、迎候する公權をけり、  
このこと不安あり、屢々いふと、言々わくも仲野

休之曾孫家法嚴肅儉約為播紳家

楷範歸柳氏三年無少長未嘗見其

啓齒常衣絹素不用綾羅錦繡

歸て三年に於るまじく、少も長も、齒の啓

齒と放と見未、常に絹素と衣て、綾羅錦繡と用

歸觀する毎に金碧の輿に乗不風竹兜子に乗一の

青衣步履して以隨ふ常に命トて苦參黃連熊膽と粉や

和で丸と為諸子に賜永夜習學する毎に之と會以勤苦と資

江州陳氏宗族七百口、毎食設廣

席長幼以次坐而共食之、有畜犬百

餘共一牢食、一犬不至、諸犬為之不

食、江州國に陳氏あり、宗族十代同居、

江州の陳氏宗族七百口、毎食設廣

席長幼以次坐而共食之、有畜犬百

餘共一牢食、一犬不至、諸犬為之不

食、江州國に陳氏あり、宗族十代同居、

江州の陳氏宗族七百口、毎食設廣

席長幼以次坐而共食之、有畜犬百

餘共一牢食、一犬不至、諸犬為之不

食、江州國に陳氏あり、宗族十代同居、

大之為に食せ

食しけく齒の長少の次第に坐席とたふし共に  
食しけく齒の長少の次第に坐席とたふし共に  
食しけく齒の長少の次第に坐席とたふし共に  
食しけく齒の長少の次第に坐席とたふし共に

温公の日國朝

○温公曰國朝公郷能守先法久而

の公郷能先法

不衰者唯故李相家子孫數世至二

と守久く先法

百餘口猶同居共爨田園邸舍所收

唯故李相の家

及有官者俸祿皆聚之一庫計口日

の子孫數世

給餉婚姻喪葬所費皆有常數分命

二百餘口に至

子弟掌其事其規模大抵出於翰林

猶同居同

學士宗諤所制也

爨共六人

給餉婚姻喪葬の

田園邸舍の收

の費す加計常數

所及官に有者

の賞錢又ハ同居のものハ官俸祿

の俸祿其旨之

て一つの庫に入れて人の口數と計録と給

一庫に取水口と

くの子孫に分命してその事とせしめ

計て日に餉と

一ケリ、その規模大抵翰林とて學校の士に示

給餉婚姻喪葬の

費す加計常數

有子孫に分ら

命トて其事と

掌して其規

模大抵翰林學

士宗諤が制す

る所に出也

右明倫と實に

右實明倫

す

小學卷之九終

讀法

小學卷之十

小學卷之十

或問第五倫

或問第五倫曰公有私乎對曰昔人

有與吾千里

有與吾千里馬者吾雖不受每三公

有所選舉

有所選舉心不能忘而亦終不用也

吾兄子嘗病

吾兄子嘗病一夜十往退而安寢吾

子有疾

子有疾雖不省視而竟夕不眠若是

者豈可謂無私乎

者豈可謂無私乎

子疾有省視

子疾有省視而竟夕不眠若是若

經典餘師

小學卷之九

三十一



者豈私無一  
謂可乎

劉寬倉卒未嘗疾言遽色未嘗夫人寬之試之  
會に當て裝嚴已訖  
侍婢で肉羹と奉て翻て朝衣と汚使婢遽之之と扱寛  
神色異あ不乃徐に言て

日。美汝が手と爛す乎。其性度此如

張湛矜嚴好禮と好。動止則有幽室に居處する必す自脩整す妻子に遇て雖嚴君の若那黨に在に及て言と詳ふ  
色と正色三輔以儀表と焉  
幽室に居處する

の同職と人と詔に選舉の相談あるを以て  
いふもその都のやとやいふ心にもなれり  
是ららの私意ありやうか  
かろしとと一夜に十さび問安否に往たりとも  
退く畏呀に好侍  
の省視ともいふも  
吾子の疾に  
私意のこころいふも

○劉寬雖居倉卒未嘗疾言遽色夫人欲試寬令恚伺當朝會裝嚴已訖使侍婢奉肉羹翻汚朝衣婢遽收之寬神色不異乃徐言曰羹爛汝手乎其性度如此

倉卒とてあそ、遽忽とて色と  
あつとて夫人あれと試觀と、侍婢へよて  
つち、朝廷の會に出と、裝嚴すとに訖、後肉羹とたると、あつとて、翻とて、膝と汚  
一々に劉寬の神色すと異ならず徐に言々  
羹あつと手と爛バセウーヤ、いふなり、その性度つゝに如此にありと

○張湛矜嚴好禮動止有則居處幽室必自脩整雖遇妻子若嚴君焉及在鄉黨詳言正色三輔以為儀表

張湛といふ人、性質矜嚴、常の動止も則あり、禮儀たつと好て、平生の居處なり、人に及て、幽室に居るも、身を脩整して、萬事嚴重なり、妻子も君と嚴尊の例に

郷里にある言をあるふた、顔色と正  
なるなり、依て三輔の位にある貴人といふ、

儀表と建武初為左馮翊告歸

平陵望寺門而歩主簿進曰明府位

尊德重不宜自輕湛曰禮下公門軾

路馬孔子於郷黨恂恂如也父母之

國所宜盡禮何謂輕哉建武年中に三  
輔の中のを馮

翊といつる官あやう、君に服と乞  
へる古郷へ歸る、去るにその郷を治る官

人のほめる寺の門をもぐる、車より下て  
歩けぬそれと屬官主簿の職のゆゑなり

今、今日明府ふ位た、徳あり、輕率にある  
べく、張湛とありて、禮あり公

儀の門より下、又君の路馬の軾禮を  
とく、又聖人の郷黨の恂恂如に

輕とあり、父母のらく、郷に

揚震所舉荊州茂才王密為昌邑

令謁見懷金十斤以遺震震曰故人

知若君不知故人何也密曰莫夜無

知者震曰天知神知我知子知何謂

無知密愧而去漢の揚震は荊州の刺史

と、よめを引擧て昌邑の令吏といふ  
け、ある田を、揚震に謁見に、懷中よ

り金子十斤を、あるゆゑ、君の心と、君の心と

建武の初左馮翊  
翊と為平陵に  
告歸して寺門  
と望んで而して歩  
主簿進曰明  
府位尊德重  
不宜自輕  
湛曰禮下公門  
軾路馬孔子郷  
黨に於恂恂如  
也父母之國ハ  
宜禮と盡宜  
所がり何輕  
謂乎宜に破

揚震所舉所の荆  
州の茂才王密昌  
邑の令為謁見す  
るに金十斤と懷中  
に遺震に遺震曰  
故人君と知君  
故人と知不  
何と也密曰莫  
夜知者無震曰  
天知神知我知  
子知何ぞ知  
無と謂密愧  
て而して去

くひハ誰し知れども揚農くきくひハ夜も其  
たふ夜もいふと天道知れり神明あり我  
も知て吾子も知れども其の四の知てありい  
ふといふたれハ王密  
愧つて去る

茅容等輩與  
兩樹下に避  
衆皆夷踞して  
相對す。容獨危  
坐して愈恭。  
郭林宗行之と  
見て而して其異  
やると奇くして  
遂に與に共に言  
ふ。因請て寓宿  
す。旦日容雞  
と殺て饌に爲す

○茅容與等輩避兩樹下。衆皆夷踞、  
相對。容獨危坐、愈恭。郭林宗行、見之  
而奇其異。遂與共言。因請寓宿。旦日  
容殺雞爲饌。林宗謂爲已設。既而供  
其母。自以草蔬與容同飯。林宗起拜  
之曰。卿賢乎哉。因勸令學。卒以成德。

林宗謂己の饌  
設し既而而  
して其母に供す  
の草蔬と以て  
容與同く飯す。林  
宗起て之と拜  
して曰。卿賢  
乎哉。因勸て學  
令率に以て徳  
と成り

漢の代の茅容といふ人、等輩の友、明敷人と  
つれづれ遊し、振るるまがれにあり、樹下に  
しり、避り、まゝに衆人、足をかき、夷踞して坐  
し、茅容も危坐し、あつらひに恭敬を以て、  
たり、當時の大儒郭林宗といふ人、林宗とい  
ふ人、林宗に異なり、奇くつらふ共言といふ  
とれり、請てその家に寓宿せり、これ且日、茅  
容、雞と殺り、饌具とあり、之を以て、林宗  
に供し、之を以て、草蔬の饌あり、平生  
の如く、我も容と飯と食し、これに因て、林宗  
起て、その徳と拜し、かくた、卿に賢者なりと  
大徳とかり、人に重なり、と云

陶侃廣州の刺  
史、爲州に在  
て事無ハ朝  
に百甓を齋外  
に運、莫に齋内

陶侃爲廣州刺史。在州無事。朝  
運百甓於齋外。莫運於齋内。人問其

運人其故問  
答曰日五口方に力  
と中原に致せん  
優逸に過爾也。

後荆州刺史  
為侃性聰敏  
勤於吏職に勤  
恭にして而  
禮に近人倫  
愛好。終日膝  
危坐。閩外事  
多。千緒萬端  
多。千緒萬端  
多。千緒萬端

故答曰吾方致力中原過爾優逸恐  
不堪事其勵志勤力皆此類也

後為荆州刺史侃性聰敏勤於吏職恭而近禮愛好人倫終日膝危坐閩外多事千緒萬端固有遺漏遠近書疏莫不手答筆翰如流未嘗壅滯引接疏遠門無停容

問遠近の書  
疏手づる答不  
流如。未嘗壅  
滯。未疏遠を  
引接して門に停  
容無。未。於  
常人に語曰。大  
禹。聖人。乃乃  
寸陞と惜。衆人  
に至るに當に分陞  
と。當。豈。遊  
荒。醉。可。や。生  
時に益無死して  
後。問。是  
自棄也。當。於  
諸。叅。佐。或。以。譚  
戲。以。事。と。廢

常語人曰  
大禹聖人乃惜寸陞至於衆人當惜分陞豈可逸遊荒醉生無益於時死無聞於後是自棄也  
諸叅佐或以譚戲廢事

者乃命取其酒器蒲博之具悉投之  
 于江。吏將則加鞭朴曰樗蒲者牧猪  
 奴戲耳。老莊浮華非先王法言不可  
 行也。君子當正其衣冠攝其威儀何  
 有亂頭養望自謂弘達耶。  
諸參佐の譚  
 戲かくして事  
 に廢とのつれぬ命はくそつ酒器又ハ  
 蒲博具ヤと江にうら投せすくそつ又吏將ハ  
 とれさやうのたぐひハ鞭朴と以てつてつハ  
 やう、樗蒲のわらひハ牧奴との戲遊やう、そつ  
 ひるもの所作にあつた或ハ世の作法をそつて  
 うらしむるハ老子莊子の浮華とそつものあつてけつ  
 一ハ先王聖人の法ある言にあつて君子ハ衣冠  
 とたつて威儀と攝べさつて頭の髮とそつて世に

者乃命取其酒器蒲博之具悉投之  
 于江。吏將則加鞭朴曰樗蒲者牧猪  
 奴戲耳。老莊浮華非先王法言不可  
 行也。君子當正其衣冠攝其威儀何  
 有亂頭養望自謂弘達耶。  
諸參佐の譚  
 戲かくして事  
 に廢とのつれぬ命はくそつ酒器又ハ  
 蒲博具ヤと江にうら投せすくそつ又吏將ハ  
 とれさやうのたぐひハ鞭朴と以てつてつハ  
 やう、樗蒲のわらひハ牧奴との戲遊やう、そつ  
 ひるもの所作にあつた或ハ世の作法をそつて  
 うらしむるハ老子莊子の浮華とそつものあつてけつ  
 一ハ先王聖人の法ある言にあつて君子ハ衣冠  
 とたつて威儀と攝べさつて頭の髮とそつて世に

王勃楊炯盧照鄰駱賓王  
 照鄰駱賓王  
 皆文名有之  
 四傑と謂裴行  
 檢曰士之致遠先  
 致也。器識と  
 先かて而して文  
 藝と後ハ人勃  
 等文名有之  
 而浮躁淺露  
 かり。器識と  
 亭い器識と耶  
 楊炯盧照鄰  
 應に令長と得  
 應餘ハ終と令  
 すとと得ハ幸ハ

○王勃楊炯盧照鄰駱賓王皆有文  
 名謂之四傑裴行檢曰士之致遠先  
 器識而後文藝勃等雖有文才而浮  
 躁淺露豈享爵祿之器耶楊子沉靜  
 應得令長餘得令終爲幸其後勃溺  
 南海照鄰投穎水賓王被誅炯終盈  
 川令皆如行檢之言。  
唐の裴行檢  
 重なる人あり能人  
 の器識と識の智ありハそつやうハ人の先と遠  
 にとと得ハ幸ハ

為其後勃南  
海に溺照鄰  
頼水に投宿  
王誅被燭  
盈川つ令に終  
昔行儉之言の  
如應三渡

孔戡義と為に  
於て嗜欲の  
若前後と顧  
ホ利と禄與に  
於る則ち畏避  
退怯して懦夫  
の如然

柳公綽外藩に  
居其子境に入  
毎に郡邑未嘗  
て知不既に至  
て出入する毎に  
常に戟門の外  
に於て馬より下  
幕賓と呼太  
と為皆拜と  
納しと許未  
嘗て笑語未  
洽せず未三渡

柳仲郢禮と以  
身と律す家に  
居て事無し亦  
端坐して手と

文章の藝へ後にソクベシヤリ、當時人のナ  
シテソクベシヤリ、四人のソクベシヤリ、王勃ハ、  
アケル浮躁しく、浅露ヤリ、官爵とソクベシヤリ、  
にラケ、又揚炯ハ沈靜なる為人ヤリ、若クハ  
長クソクベシヤリ、その餘の盧照鄰と駱賓王等若  
終とソクベシヤリ、  
王勃ハ海に溺て死シ、照鄰ハ嶺川の淵へ身  
トナヅク死シ、賓王ハ兵と起テ謀ルヤリ、  
揚炯ハ盈川とソクベシヤリ、  
けして行儉の言のソクベシヤリ、

孔戡於為義若嗜慾不顧前後於  
利與禄則畏避退怯如懦夫然  
聖人より三十六代の子孫ヤリ、義理の  
事とソクベシヤリに臨テ、常人の嗜慾とソクベシヤリ  
又利欲官禄のソクベシヤリ畏避して懦夫  
の如然

○柳公綽居外藩其子每入境郡邑  
未嘗知既至每出入常於戟門外下  
馬呼幕賓為丈皆許納拜未嘗笑語  
欵洽柳公綽浴外の藩にありて、その子仲郢  
のソクベシヤリ知ザリ、是人に逢迎のソクベシヤリ  
ソクベシヤリヤリ、出入も戟門の外に、  
下テたテ、戟門の外に戦とたテ、  
ナリ、幕賓客と呼も、名字とソクベシヤリ何某  
丈とソクベシヤリ、  
父子たソクベシヤリ、  
○柳仲郢以禮律身居家無事亦端  
坐拱手出内齋未嘗不束帶三為大

拱（内）末（堂）末（末）帶（末）不（末）末（末）大（末）鎮（末）為（末）良（末）馬（末）無（末）衣（末）香（末）不（末）薰（末）公（末）退（末）必（末）讀（末）書（末）

家（末）法（末）在（末）官（末）不（末）奏（末）祥（末）瑞（末）不（末）度（末）僧（末）道（末）不（末）賃（末）賊（末）吏（末）法（末）凡（末）理（末）藩（末）府（末）急（末）於（末）濟（末）貧（末）卹（末）孤（末）有（末）水（末）旱（末）必（末）先（末）期（末）假（末）賃（末）廩（末）軍（末）食（末）必（末）精（末）豐（末）通（末）租（末）必（末）貫（末）免（末）館（末）傳（末）必（末）增（末）飾（末）宴（末）賓（末）犒（末）軍（末）必（末）華（末）盛（末）而（末）交（末）代（末）之（末）際（末）食（末）儲（末）帑（末）藏（末）必（末）盈（末）溢（末）

精（末）豐（末）通（末）租（末）必（末）貫（末）免（末）館（末）傳（末）必（末）增（末）飾（末）宴（末）賓（末）犒（末）軍（末）必（末）華（末）盛（末）而（末）交（末）代（末）之（末）際（末）食（末）儲（末）帑（末）藏（末）必（末）盈（末）溢（末）

鎮（末）廐（末）無（末）良（末）馬（末）衣（末）不（末）薰（末）香（末）公（末）退（末）必（末）讀（末）書（末）  
手（末）不（末）釋（末）卷（末）  
拱（末）三（末）大（末）國（末）の（末）鎮（末）に（末）適（末）分（末）の（末）良（末）馬（末）と（末）ヤ  
一（末）の（末）衣（末）服（末）に（末）薰（末）香（末）と（末）シ（末）テ（末）公（末）朝（末）に（末）退（末）テ（末）ハ  
モ（末）グ（末）ク（末）モ（末）書（末）卷（末）を（末）手（末）に（末）釋（末）ス（末）ル（末）コト（末）ナリ（末）

家（末）法（末）在（末）官（末）不（末）奏（末）祥（末）瑞（末）不（末）度（末）僧（末）道（末）不（末）賃（末）賊（末）吏（末）法（末）凡（末）理（末）藩（末）府（末）急（末）於（末）濟（末）貧（末）卹（末）孤（末）有（末）水（末）旱（末）必（末）先（末）期（末）假（末）賃（末）廩（末）軍（末）食（末）必（末）精（末）豐（末）通（末）租（末）必（末）貫（末）免（末）館（末）傳（末）必（末）增（末）飾（末）宴（末）賓（末）犒（末）軍（末）必（末）華（末）盛（末）而（末）交（末）代（末）之（末）際（末）食（末）儲（末）帑（末）藏（末）必（末）盈（末）溢（末）

於（末）始（末）至（末）境（末）內（末）有（末）孤（末）貧（末）衣（末）纓（末）家（末）女（末）及（末）笄（末）者（末）皆（末）為（末）選（末）婚（末）出（末）俸（末）金（末）為（末）資（末）裝（末）嫁（末）之（末）法（末）  
一（末）の（末）朝（末）廷（末）へ（末）シ（末）テ（末）祥（末）瑞（末）と（末）奏（末）聞（末）ス（末）ル（末）コト（末）ナリ（末）  
一（末）の（末）道（末）場（末）へ（末）シ（末）テ（末）入（末）ル（末）コト（末）ナリ（末）  
一（末）の（末）化（末）度（末）と（末）交（末）職（末）と（末）由（末）ル（末）コト（末）ナリ（末）  
一（末）の（末）理（末）に（末）貧（末）と（末）濟（末）ス（末）ル（末）コト（末）ナリ（末）  
一（末）の（末）急（末）に（末）水（末）溢（末）旱（末）の（末）コト（末）ナリ（末）  
一（末）の（末）期（末）に（末）先（末）へ（末）米（末）錢（末）等（末）と（末）假（末）賃（末）カ（末）と（末）ミ（末）テ（末）ケ（末）ル（末）コト（末）ナリ（末）  
一（末）の（末）廩（末）に（末）精（末）一（末）の（末）軍（末）糧（末）と（末）豐（末）た（末）ク（末）ハ（末）一（末）の（末）租（末）と（末）連（末）欠（末）ハ（末）必（末）ず（末）貫（末）免（末）つ（末）り（末）ケ（末）ル（末）コト（末）ナリ（末）  
一（末）の（末）館（末）を（末）手（末）に（末）傳（末）ハ（末）ル（末）コト（末）ナリ（末）  
一（末）の（末）増（末）飾（末）と（末）シ（末）テ（末）一（末）の（末）實（末）と（末）實（末）一（末）の（末）軍（末）兵（末）と（末）犒（末）ス（末）ル（末）コト（末）ナリ（末）  
一（末）の（末）華（末）盛（末）ナ（末）リ（末）而（末）一（末）の（末）同（末）官（末）交（末）代（末）の（末）際（末）に（末）食（末）儲（末）帑（末）と（末）至（末）ル（末）コト（末）ナリ（末）  
一（末）の（末）境（末）內（末）に（末）孤（末）貧（末）と（末）一（末）の（末）衣（末）纓（末）家（末）の（末）女（末）笄（末）及（末）一（末）の（末）皆（末）為（末）選（末）婚（末）と（末）一（末）の（末）資（末）裝（末）と（末）為（末）テ（末）一（末）の（末）之（末）と（末）嫁（末）（於）

柳玘曰王相國涯相位居利權與掌利權者實氏女歸請曰玉工一銀の奇巧なるを貨七百萬錢と須い

○柳玘曰王相國涯方居相位掌利權實氏女歸請曰玉工貨一釵奇巧須七十萬錢王曰七十萬錢我一月俸金耳豈於女惜但一釵七十萬此妖物也必與禍相隨女子不復敢言

唐の王相國宰相の位に居て權威一人にたりいさややめで利欲なるべしと實氏へつと

數月ありて女婚姻の會自歸て王に告て曰前

唐の王相國宰相の位に居て權威一人にたりいさややめで利欲なるべしと實氏へつと

時銀馮外郎が妻の首飾と為乃馮球也王歎曰馮爲郎史

唐の王相國宰相の位に居て權威一人にたりいさややめで利欲なるべしと實氏へつと

飾七十萬錢有其實久る可ん乎

唐の王相國宰相の位に居て權威一人にたりいさややめで利欲なるべしと實氏へつと



威福と張馮召而勗之  
 未決旬馮晨に賈に書  
 馮晨に賈に書  
 地黃酒と捧  
 出之之と飲  
 食頃少て而  
 終賈為に潔  
 其由と知不又  
 明年王賈皆  
 禍に遭(未)

密賈有蒼頭頗張威福馮召而勗之  
 未決旬馮晨謁賈有二青衣捧地黃  
 酒出飲之食頃而終賈為出潔竟不  
 知其由又明年王賈皆邁禍球率相賈  
鍊の門人とかた、賈鍊と密うらぐるに賈鍊  
の家の蒼頭に、何某とこころめり、まかりて威  
福にけり、馮球ある日召てあれ、勗く、  
めら未決旬一て馮球晨とく、まかりて、賈鍊に  
謁、二二人の青衣地黃の酒をうけて、  
ち、飲む、食頃、命、く、これ、ささ  
蒼頭身の、かぎり、と告げ、い、み  
と、い、け、ま、る、り、賈鍊、く、  
と、竟、に、の、由、來、と、ま、り、又、の、明、年  
の、賈、鍊、も、王、相、國、も、謀、殺、の、讒、言、に、

噫王以珍玩奇貨  
 為信に知言を  
 徒に物之妖を  
 知て、而し思權  
 隆赫之妖物り  
 甚と知不耶  
 馮昇位と以賈  
 貨と貪、已に其  
 家と正する能  
 不忠と事所に  
 盡く、而し其身  
 と保く、能不、斯  
 亦言に足不、賈  
 之藏獲門客と  
 播廡之間に害  
 す、而し知不、  
 終始富貴を

噫王以珍玩奇貨為物之妖信知言矣徒知物之妖  
 而不知恩權隆赫之妖甚於物耶馮  
 以昇位貪寶貨已不能正其家盡忠  
 所事而不能保其身斯亦不足言矣  
 賈之藏獲害門客于播廡之間而不  
 知欲終始富貴其可得乎此雖一事  
 作戒數端柳玘、これ、と、評、一、千、王、相、國、  
珍奇、奇貨、かた、妖物、まかり、と、  
終始富貴、まかり、まかり、  
徒に王叙の妖

欲其其得可  
九平此一事雖  
戒めを作し數  
端(矣)於(乎)

王文正公發解  
南省廷試皆首  
冠或戲之曰狀元  
三場に試る一  
生弊著す  
盡不公正色と正  
生之志温  
飽に在不

物といふことと君の恩徳にあけり、權威を  
隆赫せしむの效やまるとあらず、はよみつて  
馬球界身あり、賈貨とむさがり、家内とた  
てかろむたり、賈鍊や家内の穢獲と、海球と  
に毒害と、一時の事や、始終富貴と、必ふも  
得るらん、一時の事や、始終富貴と、必ふも  
あつらん、入る、を、藩庶、つ、わづの、ま、り  
ま、り、あ、む、間、と、此、ろ、ろ、ま、り

○王文正公發解南省廷試皆為首

冠或戲之曰狀元試三場一生弊著

不盡公正色曰曾平生之志不在濫

飽王文正公の名を曾とせり、宋朝の大臣

あり、一に郷の學校あり、試を發解といふ、  
試む所の事と發解といふ、二に、

省といは彼所なり、三に、朝廷あり、直に天子の試たり、  
王公のその三に、試を首冠とせり、天子の  
人王公とせり、試を戲言にせり、君の三の  
場所あり、狀元たり、一生の生涯の衣食  
たりて、弊と著し、盡めし、王公たり、  
と、い、ま、ん、色、と、正、て、い、ま、ん、く、り、ら、れ、  
の、民、と、せ、ん、を、我、ら、ら、る、中、に、飽、  
飽に温うかり、為

○范文正公少有大節其於富貴貧

賤毀譽歡戚不一動其心而慨然有

志於天下嘗自誦曰士當先天下之

憂而憂後天下之樂而樂也

范文正公の  
年少なり

范文正公少  
有大節有其富  
貴貧賤毀譽歡  
戚に於て其心  
と動く不し而  
て慨然として天  
下に志す有る嘗  
自誦曰士當先  
天下之憂に先  
而憂天下之  
樂に後して而

當也於當二度

其上二輕人一遇二一一以自信一利害二擇一趨捨二為一不二其為一所有二必其方一盡二日之一為二我一自二者一當二是一之二如一當二其成一否二與一我二在一不二者一有二聖賢一雖二必一吾二豈一苟二哉一

節大二富貴一賤二寒賤一威二威一に心二と一と二天下一の二慨然一に二謙一天二下一の二憂一又二天一下二の一樂二我二た一る二か一る二人一の二志一氣二大一の二上一に二附一る二公一自二信一其事二上一遇二人一一二以一自信二不二擇一利害二為一趨捨二其一有二所一為二必一盡二其一方二日一之二為一我二自一者二當一是二之一如二當一其成二否一與二我一在二不一者二有一聖賢二雖一必二吾一豈二苟一哉二哉一

司馬溫公嘗言

吾無過人者但平生所為未嘗對人言者耳

嘗坐一木榻積五十餘年未嘗箕股其榻上當膝處皆穿未二度

吾二且一に二か一る二吾一と二も一の二苟一且二に一か二る一

○司馬溫公嘗言吾無過人者但平生所為未嘗對人言者耳

温公嘗に言、われ徳を人よりして一として人に過る、  
一ハハ、但平生身に於て、心にしるる、  
か、一ハ、一ハ、人二に一對二して一

○嘗箕股其榻上當膝處皆穿未二度

嘗箕股其榻上當膝處皆穿未二度

呂正獻公少

自學講學

即心以本

為嗜慾寡

滋味薄疾

言遜色無

無惰容無

凡嬉笑但

語未嘗諸

學聲伎游

玩以博奕

淡然無所

無(未)讀(矣)

明道先生終

日端坐泥

聖人之如

接人至及

則渾是一

團和氣

明道先生字

いづの常のく木地の榻に坐して人より五  
十餘年と積にいと一度もさうくに坐せり  
たり其の手にてふ股の跡ありていと  
とやう、それ榻に膝の跡ありていと

○呂正獻公自少講學即以治心養

性為本寡嗜慾薄滋味無疾言遜色

無窘步無惰容凡嬉笑但近之語未

嘗出諸口於世利紛華聲伎游宴以

至於博奕奇玩淡然無所好

容とさき、嬉笑する、但近無語、  
り、性、養育と本として、心の、  
慾と寡滋味あり、食と、さうに薄し、  
色なく、疾言いと、窘く歩と、  
容とさき、嬉笑する、但近無語、  
り、性、養育と本として、心の、  
慾と寡滋味あり、食と、さうに薄し、  
色なく、疾言いと、窘く歩と、

○明道先生終日端坐如泥塑人及

至接人則渾是一團和氣

團和氣

團和氣

團和氣

團和氣

團和氣

團和氣

○明道先生作字時甚敬常謂人曰

明道先生作字時甚敬常謂人曰

明道先生作字時甚敬常謂人曰

明道先生作字時甚敬常謂人曰

の好しと欲するに非ず即此は是れ學

劉忠定公温公に見て心と重んずと作の要を以て終身之問公曰

其誠と何先之何先公曰不安語始

劉公始其退之易退而自慊

及以日之行所相擊則形影

七年而後成自此言行一致表裏相

言行一致表裏相應也事に遇て坦然して常に餘裕有る矣

劉公温公に

譚論踰時體無欬側

劉公温公に

劉公温公に

劉公温公に

劉公温公に

非欲字好即此是學勉生文字と作りたるのふていかりおれつしむと學問の重んずるなりと

劉忠定公見温公問蕙心行己之要可以終身行之者公曰其誠乎劉公問

行之何先公曰自不安語始劉忠定公ハ門人なり温公またつひつひ何とぞ心と盡て終身にこころの服野とつひつひ終身これと行ひたの義なり劉公又とひつひ誠とひつひ何とぞ

劉公初劉公初

甚易之及退而自慊日之所行與凡所言自相擊則矛盾者多矣凡行

七年而後成自此言行一致表裏相

應遇事坦然常有餘裕劉公温公に

言行一致表裏相應也事に遇て坦然して常に餘裕有る矣

劉公温公に

劉公見賓客譚論踰時體無欬側

劉公温公に

無肩背疎直。身少動。手足亦不移。

徐積仲車初安

定。胡先生從之學。心潛。行。復仕進。不其學。至誠。以本。至孝。初見安定先生。退。頭容少。聲。頭容直。某因。

肩背疎直。身不少動。至手足亦不移。

劉忠定公。人。譚論時刻。踰。體。敬。肩背。疎直。あり。躬。動。手足。の。か。ま。ら。ず。

徐積仲車初從安定胡先生學。潛

心力行。不復仕進。其學以至誠為本。

事母至孝。自言初見安定先生。退頭

容少偏。安定忽厲聲。頭容直。某因

自思。不獨頭容直。心亦要直也。自此

不敢有邪心。卒謚節孝先生。

門人。學問。心。習。行。官。祿。進。仕。學。問。の。風。誠。を。本。と。習。ふ。に。進。む。に。母。に。孝。行。せ。り。常。に。頭。容。直。く。初。見。先生。退。出。の。時。頭。容。少。く。偏。さ。る。ば。胡。先。生。を。見。て。聲。を。厲。し。頭。容。直。く。す。と。心。を。要。す。直。く。す。と。後。に。節。孝。先。生。と。謚。せ。り。

文中子之服儉以絜無長物焉綺

羅錦繡不入于室曰君子非黃白不

御婦人則有青碧

長。綺。羅。錦。繡。不。入。于。室。の。と。し。て。御。婦。人。の。則。ち。青。碧。を。有。す。と。す。

御婦人則有青碧

長。綺。羅。錦。繡。不。入。于。室。の。と。し。て。御。婦。人。の。則。ち。青。碧。を。有。す。と。す。

御婦人則有青碧

長。綺。羅。錦。繡。不。入。于。室。の。と。し。て。御。婦。人。の。則。ち。青。碧。を。有。す。と。す。

經典、余市

小學卷之十

十五

柳玘曰高侍郎兄弟三人俱居清客と速に非れ美哉と一にせ不夕食う葡萄飽と

○柳玘曰高侍郎兄弟三人俱居清

列非速客不二羹載夕食飽葡萄飽而

已ハ柳玘の語に唐の高侍郎兄弟三人の俱に清列なる位に居ける常に客を速

とさかすてハ羹と載といはる置ざりたり夕飯

ハ葡萄飽と云ふハ葡萄の飽のさかするものみ等ざるなり

○李文靖公治居第於封丘門外廳

事前僅容旋馬或言其太隘公笑曰

居第當傳子孫此為宰輔廳事誠隘

為太祝奉禮廳事則已寬矣本亭公居第

封丘門の外にかまへに廳事の前より馬を旋

馬と云ふハ旋馬の意也或ハ其太りと隘と云ふ

言ハ公笑て曰く居第ハ當に子孫に

傳當此宰輔の廳事為誠に隘

寬矣云

太祝奉禮の廳

事為則已寬矣

張文節公相為

自奉奉若此

河陽の掌書記

の時の如親

所の或規之

而自奉若此

規て曰公奉

吾今日之俸

雖舉家錦衣玉食何患

柳玘曰高侍郎兄弟三人俱居清客と速に非れ美哉と一にせ不夕食う葡萄飽と

列非速客不二羹載夕食飽葡萄飽而

已ハ柳玘の語に唐の高侍郎兄弟三人の俱に清列なる位に居ける常に客を速

とさかすてハ羹と載といはる置ざりたり夕飯

ハ葡萄飽と云ふハ葡萄の飽のさかするものみ等ざるなり

○李文靖公治居第於封丘門外廳

事前僅容旋馬或言其太隘公笑曰

居第當傳子孫此為宰輔廳事誠隘

為太祝奉禮廳事則已寬矣本亭公居第

封丘門の外にかまへに廳事の前より馬を旋

馬と云ふハ旋馬の意也或ハ其太りと隘と云ふ

言ハ公笑て曰く居第ハ當に子孫に

傳當此宰輔の廳事為誠に隘

寬矣云

太祝奉禮の廳

事為則已寬矣

張文節公相為

自奉奉若此

河陽の掌書記

の時の如親

所の或規之

規て曰公奉

吾今日之俸

雖舉家錦衣玉食何患

雖外人頗

公孫布被之譏公宜少從衆公嘆曰

吾今日之俸

雖舉家錦衣玉食何患





羹に止り。器ハ莞  
添と用。當時の  
士大夫皆然。人  
相非不也。會數  
而禮勤。物薄而  
情厚。未三渡

近日士大夫の  
家酒内法に非  
異に非。食多  
品に非。器皿案  
に滿に非れ。敢  
賓友と會せ不

常に數日營聚  
して。然後敢て  
書と發。苟或  
然。不。人。爭  
之。と。非。以。鄙  
吝。と。為。故。に。俗  
に。隨。て。奢。靡。者  
不。者。鮮。矣。

嗟乎風俗頽  
弊。是。之。如。位。に  
居。者。禁。止。さ。る。能  
不。雖。之。と。助  
不。能。禁。忍。助。之。乎

脯醢菜羹。器用。莞漆。當時士大夫皆

然。人。不。相。非。也。會。數。而。禮。勤。物。薄。而。

情。厚。温公の先公郡牧の判官代なり。時

のり。その。三。行。々。五。行。の。定。規。あり。可。と。と

七。行。に。及。し。一。の。り。酒。の。市。ふ。可。と。と

酒。の。の。家。造。の。美。酒。と。も。果。子。の

梨。栗。棗。柿。の。器。物。ハ。又。ハ。漆。器。と。も。果。子。の

時。繪。錦。具。と。も。當。時。の。士。大。夫。の。然

め。非。薄。情。の。厚。と。な。り。近。日。士

大。夫。家。酒。内。法。果。非。遠。方。珍。異。食

非。多。品。器。皿。非。滿。案。不。敢。會。賓。友。常

數。日。營。聚。然。後。敢。發。書。苟。或。不。然。人

爭。非。之。以。爲。鄙。吝。故。不。隨。俗。奢。靡。者

鮮。矣。近日に。大。夫。士。酒。と。も。果。子。の

品。多。く。器。皿。の。案。頭。に。充。滿。せ。り。數。日。營。聚。て

賓。友。と。會。せ。不。可。也。然。は。禁。止。さ。る。能

不。者。鮮。矣。嗟。乎。風。俗。頽。弊。如。是。居。位

者。雖。不。能。禁。忍。助。之。乎。世。の。風。俗。も

位。に。居。る。の。禁。制。す。る。能。不。真。似。と。す。助。力。と。す。嗟。乎。風。俗。頽。弊。如。是。居。位

温公曰吾家本寒族世以清白相

温公曰吾家本寒族世以清白相

承。吾性華美と  
 喜不。乳兒為  
 時自。長者加  
 金銀華美の  
 服と以て。輒  
 羞赧して之と棄  
 去。年二十以て  
 科名と忝とす。  
 聞喜宴に獨  
 華と戴不。同  
 年。の。日。吾の  
 賜。違。可。不  
 也。乃。一。花。と簪  
 平生衣。寒。と  
 蔽。取。食。腹  
 充。取。亦。敢  
 て垢弊。と服。て  
 以。俗。に矯。て名

承。吾性不喜華靡。自爲乳兒時。長者  
 加以金銀華美之服。輒羞赧棄去之。  
 年二十。忝科名。聞喜宴。獨不戴華。同  
 年。曰。君賜不可違也。乃簪一花。平生  
 衣取蔽寒。食取充腹。亦不敢服垢弊。  
 以矯俗于名。但順吾性而已。

本より寒貧より世清白と以て承継より  
 依て吾性質より華靡とあはれんより  
 乳兒より長者より金銀より華美より  
 衣服よりたやまより心より羞赧て棄去より年二  
 十より忝なるも進士の科に名とあはれんより天子  
 喜ふと聞の酒宴より及第のりて天子

性。に。順。而。已

花とあはれんより公のめ花よりかより同年のいふ  
 君の命に違はんと依て花一とす  
 平生も衣服の寒よりたよむに蔽て又垢弊  
 小着せしと食の空腹よりぬくより又時の風  
 俗に矯て名と干す但る性質にふとす

汪信民嘗て  
 言。人。常。に。菜  
 根。と。咬。得。す。  
 則。百。事。做。可。  
 胡康侯之と聞  
 て。節。と。擊。手。嘆  
 賞。す。

○汪信民嘗言。人常咬得菜根。則百  
 事可做。胡康侯聞之。擊節嘆賞。

民といつる人の嘗て言ひ人の美味  
 ずく野菜との咬得て嗜慾  
 淡薄に身と持て胡康侯といつる人の  
 遂做へしとて節を撃て賞美  
 て、かへしとて節を撃て賞美

右實敬身

小學卷之十終

驥騏之才不用哇  
 步跛鼈之質無望  
 一躍蓋斯書也。或  
 捨而不顧。或賴以  
 為助。安知人々不

經典、余市

小學、後

顧。而。樂。有。賴。焉。刻。

成。因。跋。

寬政辛未四月

大岡順和藤祐謹撰



寬政三辛亥歲元版  
文久三癸亥歲再刻

江戸書肆

須原屋茂兵衛  
岡田屋嘉七  
山城屋佐兵衛

京都同

菱屋孫兵衛

浪卷同

豐田屋卯左衛門  
河内屋喜兵衛  
河内屋和助

